

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：24303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463290

研究課題名(和文) 継続教育におけるAdvancedOSCEを用いた看護実践能力評価プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Clinical Nursing Competence Evaluation Program using Objective Structured Clinical Examination (OSCE)

研究代表者

滝下 幸栄 (TAKISHITA, YUKIE)

京都府立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：10259434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：看護実践能力を的確に評価することができるOSCEプログラムの開発を行った。その結果、以下の研究成果を得た。OSCE課題は受験者の習熟度に合わせ、評価視点を明確にして設定する必要がある。プレラダーレベルのOSCEでは、「感染管理」、「安全管理」、「正確な看護技術」、「効率的な作業管理」、「患者への説明と同意」、「患者観察」、「状況把握」、「安楽への配慮」、「プライバシーの保持」、「コミュニケーション」、「看護者としての基本姿勢」、「状況と優先順位の判断」、「その場に適した言動」の項目で有効な評価が可能である。OSCEシナリオの時間経過に合致した評価表作成が必要である。

研究成果の概要(英文)：We developed the OSCE program which can evaluate clinical nursing competence exactly. As a result, we obtained the following research results. (1) It is necessary to decide the theme of OSCE according to the grade of mastery of an examinee's nursing. And it is necessary to clarify the viewpoint of evaluation and to set it up. (2) In OSCE of a pre-rudder level, we can do effective evaluation according to 13 items. 13 items -- "infection control", a "safety control", and "an exact nursing art", "efficient work management", "the explanation and consent" to a patient, "a patient's observation", "grasp of a situation", "consideration of comfortable", "consideration of privacy", "communication", "a nurse's good attitude", "a situation on that occasion and judgment of a priority", "speech and conduct which were suitable on that occasion." (3) The evaluation table of OSCE needs to agree in time progress of a scenario.

研究分野：基礎看護学

キーワード：OSCE 看護実践能力 看護基礎教育 継続教育 教育評価

1. 研究開始当初の背景

看護実践能力の育成は、看護が実践の科学であるかぎり自明の課題ではあるが、その能力をアウトカムとして把握することは難しい。看護実践能力は、知識や技術、判断力、倫理観、援助的人間関係を成立させる力など看護を行う上で必要な能力が統合された概念である。その評価のためには、重層的で多面的な手法が必要となる。その中で、看護実践能力のうち「観察ができる」能力の評価ツールとして OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) が注目され、そのナレッジが蓄積されつつある。臨床状況を再現しつつ、患者との相互作用をも加味した場面における動的な評価は、より全体的なクリニカルコンピテンスを把握できるものであり、適正な運用により看護実践能力のアウトカム把握が可能になる。このことから、効果的な OSCE プログラムを開発し、運用していくことは重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、看護実践能力を的確に評価する OSCE プログラムを策定することである。そのために、継続教育に行われている OSCE の実践内容と効果、課題を把握し、OSCE 評価視点の同定を行うことである。その成果を受けて、看護実践能力の発展につながる基本的な OSCE プログラムを策定する。

3. 研究の方法

1) A 大学附属病院の OSCE の実践内容と効果、課題の把握を行った。対象は、卒業後 1 年目 (レベル 1) 看護師 73 名、2 年目看護師 (レベル 2) 69 名、3 年目看護師 (レベル 3) 45 名であった。時期は平成 26 年 10 月 ~ 12 月であった。調査内容は、OSCE 課題内容、課題別評価結果 (得点率) 課題完遂状況、OSCE 運営上の課題、受験者の感想などである。方法は、質問紙による調

査と OSCE 評価者として研究者が参画するなかでの調査であった。

2) 日本における看護継続教育における OSCE の現状を明らかにすることを目的に文献研究を行った。分析対象文献の 10 文献をタイトル、研究目的、調査対象者、人数、調査方法の項目において分類整理した後、先行研究が提示した OSCE 文献レビューの枠組み (OSCE の実際、OSCE の効果、研究対象者の反応、研究課題) を参考に、リサーチクエスチョンを、看護継続教育において、「OSCE はどのような目的で導入されているのか」、「どのように運用されているのか」、「どのような成果があるのか」におき、文献から内容を抽出し分類した。

3) 継続教育における OSCE 実践の評価から、看護学士課程卒業前学生をプレラダーレベルとし、継続教育につながる OSCE プログラムの策定を行い、評価を行った。評価視点は評価項目別得点率と完遂率、受験者、評価者への質問紙調査、SEA (Significant event analysis) レポートである。時期は平成 29 年 10 月であり、対象者は学士課程学生 55 名、評価者・OSCE 運営者 26 名である。

4. 研究成果

1) レベル 1 においては、患者の訴えからの優先順位判断と安全管理・感染管理に係る実践能力を評価する課題が設定された。その結果、平均得点率は 85.4%、完遂率は 80.8% であった。評価の枠組み、「患者への説明と配慮」、「患者状況把握と判断」、「場面の状況判断と優先順位の判断」、「感染管理」、「安全管理」、「正確な看護技術」であった。安全管理、完全管理の得点率が高い一方で、状況判断への対応力が低い傾向が見られた。レベル 2 では、医療機器の正しい管理と安全な薬物管理を課題とする OSCE が実施された。平均得点率は 83.3%、完遂率 91.3% であった。評価の枠組みはレベル

1と同様であった。医療機器のアラーム対応に問題はないが、ハイリスク薬の安全管理並びに患者観察の得点率が低い傾向であった。レベル3では、ショック患者への対応とリーダーシップに係る課題であった。平均得点率は80.8%、完遂率は100%であった。評価の枠組みはレベル1, 2の項目に「チームコミュニケーション」が加わった。リーダーシップ行動がとれている一方で、患者観察や緊急時の安全管理行動の得点率が低い傾向であった。

全てのレベルにおいて、OSCE後の評価者によるフィードバックは「とても有効」としており、今後の課題を見つける場となったとの受験者の意見が多く見られた。運営上の課題では、ステーション間が近いため、騒音の干渉がある点が問題視された。

以上から、看護の経験年数に応じた明確な課題設定の重要性と把握したい看護実践能力の評価体系の概要が明らかとなった。

2)看護継続教育におけるOSCEの現状を明らかにすることを目的に10文献の検討を行った。その結果、継続教育では、様々な教育実践の評価ツール、看護実践能力評価基準の信頼性テストとしてOSCEが実施されていることが明らかとなった。OSCE導入の目的は、「看護実践能力の測定」を目的とした教育評価システムとしての機能とシミュレーションシナリオやOSCE評価基準を用いての授業展開、教材提供を目的とした学習支援プログラムとしての機能の2つであった。OSCE課題は、救命・救急、急変時の対応を設定しているものが多かった。OSCE導入による成果は、技術習熟の推移を見ることができることや教育機会が設定できること、OSCEを受験すること自体が学習の強化につながるという見解が見られていた。また、OSCE実践上の課題は、OSCE運営における人的、物的負担とOSCEシナリオの充実、OSCE評価に適し

た項目選別の必要性について言及されていた。

以上から、OSCEは臨床における実践能力の有効な評価手法、教育方法として導入されていることが明らかとなった。一方で、基礎教育と共通するOSCE運営の課題も明らかとなった。

3)継続教育におけるOSCE実践の成果を受けて、継続教育につながるプレラダーレベルのOSCEプログラムを検討した。OSCE実施12分、フィードバック8分を含む1回30分の設定で、多重課題状況における看護実践能力を評価する課題とした。評価の体系は、継続教育の評価視点を一部改変し、「感染管理」、「安全管理」、「正確な看護技術」、「効率的な作業管理」、「患者への説明と同意」、「患者観察」、「状況把握」、「安楽への配慮」、「プライバシーの保持」、「コミュニケーション」、「看護者としての基本姿勢」、「状況と優先順位の判断」、「その場に適した言動」の13項目で構成した。OSCEシナリオの時間経過に合致した評価表によるプログラムを策定した。

4)プレラダーOSCEの結果では、平均得点率は、 $72.7 \pm 10.6\%$ であり、最高得点率は92.8%、最低得点率は40.8%であった。課題の完遂率は92.7%であった。評価項目別では医療安全管理、患者観察、正確な実施の評価が低い傾向が見られた(図1)。

受験者の反応では、とても、まあまあと思うと答えた者が「臨床現場のリアリティを学んだ」96.2%、「自己の学習意欲の向上につながった」92.4%、「看護技術習得の機会になった」90.5%であった。SEAレポートでは、最も印象深かったのは、患者の急変への対応で有り、優先順位に関する学習の必要性を自覚する契機になっていた。今後のアクションでは、落ち着いた対応と患者の不安への対応、的確な判断の重要性や基本技術の習得、安全管理、感染管理の

確実な実施について言及されていた。

OSCE 運営の評価では、評価表は付けやすく、時間運営も問題なしとの意見であった。一方で、ステーション間隔が狭い、他のステーションの声が聞こえ、それをまねる行動があり公平性を保ちにくい等の見解が示された。

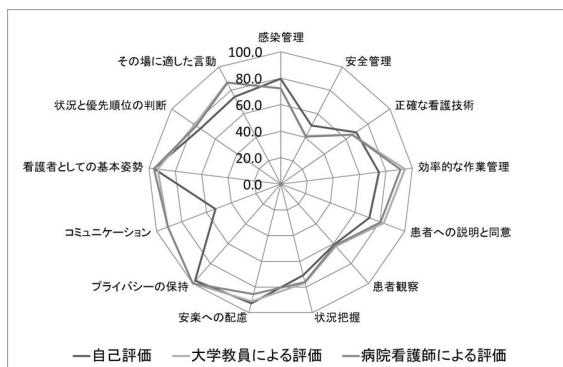


図1 評価枠組み別得点率

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

滝下 幸栄、岩脇 陽子、室田 昌子、平松 美奈子、原田 清美 看護基礎教育における多重課題対応シミュレーション教育の効果、京都府立医科大学看護学科紀要、査読有、24巻、2014、85 - 94

滝下 幸栄、岩脇 陽子、山本 容子、松岡 知子看護継続教育における OSCE の現状に関する文献検討、京都府立医科大学看護学科紀要、査読有、27巻、2017、57 - 62

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

滝下 幸栄 (TAKISHITA, Yukie)
京都府立医科大学医学部看護学科・准教授
研究者番号：10259434

(2)研究分担者

岩脇 陽子 (IWAWAKI, Yoko)
京都府立医科大学医学部看護学科・教授
研究者番号：80259431

(3)研究分担者

松岡 知子 (MATSUOKA, Tomoko)
京都府立医科大学医学部看護学科・教授
研究者番号：90290220

(4)研究分担者

山本 容子 (YAMAMOTO, Yoko)
京都府立医科大学医学部看護学科・講師
研究者番号：00321068